

目次

巻頭文 福のり子	3
・基礎プロジェクト	11
鑑賞者ボランティアの構成	11
各グループ鑑賞作品の紹介	13
参与観察者によるレポート	23
研究員によるレポート	34
学生アンケート集計・分析	40
学生週間報告「今週の名言」	45
学生最終レポート全回答	58
カリン・デ・サンティスによる学生分析	145
・実践プロジェクト	153
学生活動編	153
[1] モネパズル in オープンキャンパス	
[2] 瀬戸内国際芸術祭 田島征三プロジェクトボランティア レポート	
[3] 京都大学総合博物館「科学技術 X の謎」ギャラリートーク	
[4] メガとがびアートプロジェクト 2010 ギャラリートーク	
アート・コミュニケーション研究センター (ACC) 活動編	160
[1] 岡山県立美術館 ヴィジュアル・シンキング研修	
[2] アートで生きる in 京都	
[3] ITC 京都クラブ講演会	
[4] 大阪府立港南造形高等学校連携授業	
[5] ACC 主催セミナー 佐藤宏道「見ることの諸相」	
[6] 島根県教育委員会主催研修「対話型アート鑑賞の在り方」	
[7] 第 49 回大学美術教育学会ポスター発表・学生発表	
[8] 日本ミュージアム・マネージメント学会研究会講演	
[9] 日本パプテスト看護専門学校連携授業	
[10] 水戸芸術館現代美術センター (CAC) ギャラリートーカー研修	
・連続セミナー ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー	176
・ACOP関連取材記事	182
・2011 年度活動予定紹介	190
連続セミナー-VTS STEP 2・STEP 3	
横浜トリエンナーレ キッズ・アートガイド養成プログラム	
美術館調査「わたしたちがみた当世美術館事情」	
科学研究費基盤研究「コミュニケーションがつなぐ人とモノ」	



1	2
3	4
5	

1. モネバズル in オープンキャンパス
(2010年6月19日)
2. 京都大学総合博物館「科学技術Xの謎」展
ギャラリートーク (2010年8月29日)
3. 第49回大学美術教育学会・学生会議
(2010年9月19日)
4. 本学での鑑賞者研究プロジェクト
グループ練習初期の様子 (2010年10月)
5. 本学での鑑賞者研究プロジェクト鑑賞会
(写真は2010年12月19日)

巻頭文

福 のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

(1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科では 2004 年度から、ACOP (Art Communication Project) と名づけた「対話を基本とした鑑賞教育プログラム」を行っている。本報告書は、1 回生の必修授業 (芸術表現演習) として年間を通して行われる ACOP と、この授業を受けた上級生の学内外での活動、および 2009 年度に本学に設立されたアート・コミュニケーション研究センター (ACC) の年間活動の記録である。

私たちは ACOP の目的として、以下の 4 つを挙げている。

- 1: アートとアート作品の違いを学ぶ。アートとは作品と鑑賞者の間におこる、不思議な現象、深淵ですばらしいコミュニケーションであることを理解する。
- 2: 学生ひとり一人が、作品との豊かなコミュニケーションを図ることのできる主体的な鑑賞者になる。
- 3: 将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、彼らの不安や不満、喜び、ニーズなどを把握してもらおう。
- 4: 「作品」と「鑑賞者」の間に、より密接なコミュニケーションを確立するため、両者を結びナビゲーターの重要性を、実践を通して学ぶ。

ACOP は、「みる、考える、話す、聞く」という、通常、人間がすでにもっている 4 つの能力を用いて作品鑑賞することを基本としている。「すでに持っている」ので、できないことをするわけではない。ただし、これら 4 つの能力を意識して、使いこなしてみようと学生には伝えている。ところが、学生はまずこの基本でつまずく。彼らのつまずきや、その後の変化などを、一年間 ACOP を経験した学生が提出する「最終レポート」(P.58~) に書かれた文章を引用しながらみてみよう。

「みる」ことにおけるつまずきは、「目を開けているからみえている」という思い込みから起こる。生まれつき目のみえない人が開眼手術を受けて成功しても、すぐには形や奥行きのある世界をみることができないことがある。この事例からは、みるためには目だけではなく、経験による学習が必要だということがわかる。私たちは、経験をとおして脳に蓄積された情報をもとにみているのだ。モノを立体視できる人間は遠近感もわかり、モノを個体としてみるだけではなく、周囲の関係性によってもみることができる。こうした能力は、思考にも心理的にも (つまり脳に) 影響を与え、結果、私たちはみたいことだけをみたり、みたくないものには目をつぶったり、みえないものまでもがみえたりする (「あばたもエクボ」や「恋は盲目」は、その好事例)。みるということは、こういうすべてを含んだとても複雑な作業なのである。

しかも、脳で行われている膨大な情報処理作業のうち、人間はたった 100 万分の 1 だけしか「意識」できないといわれている。情報は無意識のなかで、それまでの経験や記憶に基づいて、編集されたり処理されたりしている。私の脳は知っているのに、「私」が知らないことが沢山あるということだ。だからこそ、「みえていないことがある」ということを自覚しながら、隅々まで作品をみる。同時に、「こ

れで全部か？他に逃していないか？」等、常に自らに問いを投げかけながらみなければならない。こういう作業は、「みる」というよりは、「読む」に近いといえる。以下の「*」は学生の最終レポートからの抜粋である。

- * 前はパッと見の印象で終わっていたのが、今は描かれ方など絵の細部にまで自然と目が行くようになりました。その細部に関してなぜ？なんで？こんな描かれ方がされているのかなど、思考の連鎖が勝手に頭の中で起こるようになりました。
みえてくるものは作品だけとは限らない。ある学生はこう述べている。
- * ACOPでは作品をみればみるほど「人」がみえてくる。作者、鑑賞者、ナビゲイター、そして自分自身。

じつは「聞く」においても、「みる」と同様のことがいえる。「聞こえている」と「聞く」には大きな隔たりがある。例えば、誰かが「私、週末、暇なんです」と言ったとする。文字通りに受け取ることもできる。しかし話し手は誰か、聞き手は誰か、あるいはどういう状況や関係、文脈でその言葉が発せられたのかによっては、「デートに誘ってください」と「読む」ことも可能だろう。

入学したての学生のほとんどが、みることと同様、「耳があるから聞こえる」と思っている。それをある学生は、「玉入れ競争の籠」と表現した。運動会で行われる玉入れの球を「他者の言葉」、籠を「自分の耳」に例えているのだ。籠がありさえすれば球が入ると思っていたこの学生は、様々な葛藤を経た後、籠だけあってもだめで、自分はその籠を支えるポールを自在に動かさなくては行けないと気づいている。受動的な「籠(耳)」は、ようやく能動的なポールを備えた「動く籠」となった。主体的な「考える耳」となったのだ。

『聞く』とは相手が話していることの意味や本質を考えながら、想像しながら聞くということであり、「自分なりに一生懸命考えて、反応できてこそ本当に『きく』ということができるとは思いません」と、他の学生も述べている。

前述の学生の文章に「反応」という言葉があるように、「聞く」は「話す」と直結している。入学当初、授業中にどんな問いかけをしても無言で座っている学生に、「どうして発言してくれないのかなあ？」と尋ねると、「べつに...言いたいことがないから」という答えが返ってくることがある。ところが、ACOPを経ると『自分には関係ない』と思って考えないことは、最も残酷な行為のような気がします。[...]完全には分かりきれないからこそ、想像して、こちらから投げかけること」が大切だと述べるようになる。

- * 「もっと知りたい」と思って会話することは、自分に対して「本当に分かったのか？」という疑問を持つことと、一度疑問に思ったらそれを相手に伝えることだと思います。「分かった」と思っても、それに疑いを持つこと、一度疑問を持つと持たないのでは、最終的な理解の度合いはまったく違います。

目の前にあること、起こっていること、さらには自分自身にも疑問を投げかけることが「学び」の原点だ。「分かった」と思っている人間に学びは起きない。分かってしまったことに人間は興味をもてないし、努力も工夫もしなくなる。分からないから興味がないではなく、分からないからこそ興味をもって、他者や社会や自分自身に「投げかける」こと。内田樹はこの「なんだかよくわからないものとのコミュニケーションの訓練」こそが、教育だと述べている(『街場の教育論』2008年、ミシマ社)。

会話とは言葉のキャッチボールのようなものだとしたら、「投げ手」は、次の瞬間には「受け手」となる。ところが、これまでの教育で学生たちは常に「受け手＝聞き手」であった。教育においてコミュニケーションが大切だと言われながら、教師は学習者に「受け手」でいることを強いてきた。静かに黙って聞いていることが、良い学生の条件のひとつだとも思われている。興味深いことに、授業時

間中、黙って座っていることがいかに苦痛かということ、身を以て知っているはずの学生がナビゲイターとして鑑賞者の前に立つと、突如「教師」に変貌する。学生はこう述べる。

* 作品のなかに答えはひとつしかなくて、それを教えてあげるのがナビゲイターの役目だと勘違いしていたのだ。[...]ナビゲイターとして前に立った瞬間に違う人になろうとする癖にも気づいた。

「教師のようではなければならない」と思っている学生は、自信がないから、つまり全部知らないから、あるいはまだ「正解」が分からないからナビゲイションはできないと、訴えてくることがある。

ACOPの授業は、彼らが大学入学までの12年間で叩き込まれた、教師＝投げ手、生徒＝受け手という一方通行の関係を、「アンラーニング」することから始まる。既存の枠組みに疑問を投げかけ、それを外すことは、究極的には「私とはこういう人間だ」という自らの枠組み(限界)を取り除き、別の角度から自分を見つめることにもつながってくる。

既存の教育システムのなかで、長年、ひとつの答えを求められてきた学生にとって、「正解」はひとつとは限らないということも、なかなか受け入れられないようだ。すぐに「正解」を求めたがる。この授業を担当している私もスタッフも、学びの場を作り、できる限りサポートは行うが、「正解」は与えない。「聞く」だけでなく、考えることもまた、「動くボールのついた玉入れの籠」のように能動的に、主体的に自らが動くことでしか始まらないからだ。いくつものアンラーニングをしなければならぬ個々の学生の状況をみながらのサポートは、正直かなり大変だ。しかし、もっときついのは、学生自身だろう。ある学生はこう述べている。ACOPは「今までの授業でいちばん楽しかったけれど、いちばん疲れた。自分が考えたり動かないと授業が進まないから」。

先ほど「正解は与えない」と書いたが、「与えることができない」というほうが正しい。なぜなら、たとえ「事実」はひとつでも、それが「意味」することは、それをみる／考える人、状況、社会、文脈によって異なってくるからだ。「あなたの真実(あるいは現実)」が「私の真実」だとは限らないし、「私の真実」すら、明日になれば変化するかもしれない。しかし、例えば、歴史を学ぶとき、重要なことは年代を覚えることだとインプットされてきた学生にとっては、誰が、どの角度からみかによって、ひとつの史実に全く異なる複数の「真実」があることは、なかなか理解されない。

複雑で不確実、しかも多様な「意味」の探求とは、様々な人や社会の価値観、経験、情報、文脈を鑑みながら、自らの知覚を総動員して考え続ける作業。そして、新しい何かに出会った時、自分を振り返り、時にその経験を塗り替え、再構築する行為こそが学びなのである。

学生の学びの過程と葛藤、そして成長については、伊達隆洋の研究員レポート「週間報告からみるナビゲイション習得までのプロセス」(P.34)を参照していただきたい。以下に「最終レポート」から、学生の文章をいくつか抜粋して紹介する。

* これまで、自分の直感に対してなぜやどうしてなどという疑問を持つことはあまりありませんでした。正直、どこかで自分の直感がすべてだと思っていた節もあります。過去に悩み、迷ったときも、正解は自分の頭の中、心の中にしかないと思い込んでいました。しかし、ACOPではそれはかえって物事を考える上での可能性や、自分自身の無限な世界を狭めていることに気づかされました。[...] 他者の言葉に耳を傾け、その本質を見極め、自分の考えや思ったことを体系的に話し、そして真に他者のことを考え思いやる。これらのことは、これからの人生、絶えず実践し極めていきたいです。

* 問題や疑問、物事に対して、ひとつではなくいくつかの方向から考えられるようになりました。

* 自分の意見だけが正しい、という姿勢ではまったく人の意見は耳に入ってきません。みんながみんな、自分と同じ意見なら、聞く必要もなくなります。自分と違う意見があるからこそ、その意見に耳を傾けないと、本当に人と向き合うことはできないのだと気づかされます。

* 優しさは自分発信ではなくその時その時の状況発信でなくてはならない。

- * 「失敗したらどうしよう」「緊張する」は私の口癖でした。すべて何も生まない言葉です。「だったらどうにかしろ！」と言ってやりたいです。
- * 優しさとは何か考えてみてください。傷つけないためにその人の欠点を言わないでにおいて、その人が自分の欠点に気づけないままになってしまったら、それを優しさといえるのでしょうか。それはきっと自分が傷つきたくないから言わないだけなのです。
- * 子どもは遊ぶのが仕事なら、若者は醜態を演じるのが仕事のようなものなのでしょう。ACOPはよい仕事ができます。
- * このプロジェクトを通して、自分には何ができて何ができなくて、あれが得意であれが苦手でというように、自身でも知り得なかったかもしれない自分自身に出会うことができた。自分は唯一自分には出会えないと思っていたけれど、それは少し違っていた。ある意味で毎日出会っていたのだ。
- * 答えのない問いに対して、答えがないからこそ考えることを学びました。そして、考え続けていく中で「答え」を導くことはできなくても、その中でたくさんの「発見」に出会えることに気づきました。

失敗してもいい。答えがみつからなくてもいい。自分の欠点を直せなくてもいい。ただし、意識をもって「みて、考えて、話して、聞く」作業はずっと続けてもらいたい。ひとりの学生が書いているように、「考え続けられるということは、言いかえればずっと成長し続けられるということなのだと思えます」。

(2) 基礎篇・年間活動経過

<前期>

- ・プロジェクトの意義を理解するために、世界の美術館の成り立ちや現状、鑑賞教育を取り巻く状況、そしてなによりもアートとはなにかについて学ぶ。
- ・古典から現代アート、あるいは通常はアートとは思われていないアニメや報道写真など、多数の作品をスライドで投影し、クラス全員で話し合いながら鑑賞をしていく。授業のルールとして「一講一口」を設ける。これは授業中、必ず一度は自分の意見を述べるというルールである。
- ・作品と鑑賞者を結ぶナビゲーターとなるために、鑑賞者へのアプローチの仕方やコミュニケーション・スキルを学ぶ。
- ・学生各自が任意の作品を選び、自らがナビゲーターとなってその作品を他の学生にみせ、話し合う。その後、初めてのナビゲーター体験の反省や感想を語りあい、それに基づいて新たな作品選びや練習を重ねる。

<夏休み期間>

- ・学生がナビゲーターとなって行う後期の「鑑賞会」に、鑑賞者として参加していただくボランティアの方々を学内外で募る。
- ・学生は夏休みの間に、鑑賞会で用いる作品を2点選び、それを選んだ理由を文章で提出する。夏休み中にその作品を使って、友人や家族を相手にナビゲーションの練習を始める。

<後期>

- ・学生を3つのグループに分け、鑑賞会に向けた練習を開始。
- ・「週間報告」を開始。これは学生の変化や悩みをできる限り把握するため、毎週、短い感想やコメントをメールで私に送ってもらうものである。「週間報告」開始当初は、100字程度の報告が届くが、日を追うにつれて文章は長くなり、内容も興味深いものになる。

- ・学生は夏休みに選んだ作品2点をクラス内で発表し、それらが本プロジェクトに適切かどうかを皆で検討する。同時に、作品について作者、様式、時代背景など様々な角度からの調査研究を重ねる。
- ・ACOPを経験した上回生数名を「メンター」として各グループにつける。私ひとりでは学生が行うすべての自主練習（後期だけで、各グループ約300時間を超える）に参加できないからだ。また、学生にとって、教師である私にはなかなか言えないことでも先輩には話しやすく、メンターから適切なアドバイスを受けることもできる。
- ・ボランティア鑑賞者に向けた説明会を開催。
- ・学生の意識を高めるため、そしてボランティアとして協力して下さる鑑賞者の方々の期待に応えるため、すべての学生に「オーディション」を行う。これは、クラスメイトを鑑賞者にして、各自が選んだ作品でナビゲーションを行い、それに対して私が評価を与えるものである。オーディションで合格点をとらなければ、本番には「出演」できないというルールを作り、合格するまで練習を重ねる。合格のために試行錯誤を重ねるなかで、学生たちは「どこがうまくいったのか、それはなぜか」あるいは、「どうすれば、もっとすばらしいナビゲーションができるようになるか」を各自、およびグループ毎に考えていく。その結果、学生同士が的確なアドバイスをし合うようになり、最終的には、学生ひとり一人がオーディションの「審査員」を務められるようになる。
- ・鑑賞会の本番開始。プロジェクターで作品を投影し、学生のナビゲイトによる鑑賞会は、2週間に1度を3回行う。その際、鑑賞者は「お客様」という意識を学生たちに徹底させる。
- ・学生は1年の活動をふり返り、アンケートおよび最終レポートを提出。

<再チャレンジについて>

鑑賞会は12月中にすべて終了するが、毎年何人かの学生がナビゲイターとして出演できずに終わる。何度オーディションを受けても、様々な理由で合格できないからだ。この授業は必修科目であり、鑑賞会への「出演」が必須条件であるため、単位を落とすと翌年も再履修しなければならない。そうした学生を救済するために、1月にもう一度オーディションを行う。教師やスタッフはオーディションの場にはいるが審査には加わず、この授業を履修している全学生のみによって審査する。

審査用の「評価シート」は、「今日のナビゲーション評価」と「今日までの活動評価」の2項目に分かれており、後者はさらに成長度、努力度、貢献度に関する質問項目に分類されている。2項目のうち、いずれかの得点が全体平均80点以上ならば合格となる。すべての項目には得点だけでなく、その点数をつけた理由を記す欄を設け、オーディションを受けた個々の学生には、他の学生が自分に向けて書いてくれた評価シートを事後に見せる。

個々の学生がナビゲーションを行うACOPは個人プレーだが、同時にグループワークでもある。ナビゲーションもコミュニケーションも、他者の存在なくしては成り立たないからだ。本番に向けての約3か月間、300時間にも及ぶ「自主練習」を、ともに日夜行っていく中で、学生たちは壁にぶつかり、争いごとにも巻き込まれ、悩み、葛藤する。こういったプロセスを経て、少しずつ、彼らは作品のみならず、自分自身や他者に対してもそれまで気づいていなかった「なにか」を発見していくのだ。こうした多くの気づきが、他者からの投げかけによって起こっていることが、「最終レポート」からも分かる。

- * 自分自身は先輩に「お前は優しいけど、思いやりがないんだよな」と言われ、考えた。
- * ある友人が私に本気の言葉をぶつけてくれました。的を射すぎていて何も言えませんでした。本当のことを言われていると分かりつつも、ショックを受けました。でも、それを言った友人も傷ついたはずで、本当のこととはいえ相手が傷つくと分かって言うのだから、かなり勇気があると思います。そうしてまで私にぶつかってきてくれた友人に感謝しています。あの時言われていなかったら、私はいつまでも自分の抱えている問題に気づけず閉じこもっていたかもしれません。

* 私はある人（ACOP の仲間）に私の性格を一言でまとめてほしいと言ったことがある。その人から返ってきた言葉は「ん～、謙虚」。私は驚いた。私の性格を謙虚なんていう人に出会ったことがなかった。たいてい「元気」「大雑把」「うるさい」などしか言われたことがなかった。でも、謙虚という言葉は当たっている気がした。自分でもよく分からないけど、なんとなくしっくりきて、なんか、泣きそうになった。

このような経験をした学生は、「自分のことは自分が一番知っていると思いがちです。でも、それはとんでもない間違いだと今では思います」と言うようになり、ようやく他者に共感しはじめるのだ。ある学生の変化をみてみよう。

* ACOP に取り組む前の私ならば、いつだって一歩引いて、傍観者を装うことに必死だった。怒りで狂いそうになっているのに冷静ぶってみたり、辛くて泣きたくても感情を押し殺したり、傷ついていても平気なふりをしてみたり、自分にも他人にも無関心を装おうとしていた。実際は装った気になっているだけであったわけだが。そういう歯がゆさが他者を苦しめていたことにも全く気づいていなかった。

この学生は、12月、ひとりの学生がオーディションに合格したときに立ち会い、そこで感じた自らの気持ちをこう述べている。

* 嬉しくて思わず泣いてしまった。言葉は出ずに涙ばかりが溢れた。これまでの私だったら拍手を送っていただけたら。この時は違った。他者の喜びが自分の中に素直に入ってきて胸を熱くした。

「再チャレンジ」に際して、オーディションの審査を学生に任せるひとつの理由は、上記の「変化」がこの学生だけではなく、多くの学生にも顕著となっているからだ。

「再チャレンジ」に関しては、12月の時点で学生たちに伝えてある。お客様を迎えての本番がようやく終了し、冬休みに入り、クリスマスや新年を迎える時期にもかかわらず、本番を経験した多くの学生たちが、「再チャレンジ」しなければいけない学生たちの練習に自主的に参加する。彼らは未合格の仲間に対して「受かってもらいたい」と、心から願っている。「評価シート」に「今日までの活動評価」を設けている理由のひとつは、協働してきた仲間への、採点する側の思いを反映したいからだ。

残念ながら、それでも落ちる学生がいる。なぜ、落ちる学生と合格する学生がいるのかには、多様で複雑な理由があり、一言では語れない。ただ、「最終レポート」に書かれた学生の文章を読むと、「再チャレンジ」で合格した学生には、12月までに合格した学生と同様、他者への共感が育っていることが分かる（先述の「ある学生の変化」で紹介した学生も「再チャレンジ」で合格している）。

昨年度この授業を受け、その年の「再チャレンジ」でも合格できなかった学生が2人いる。彼女たちは今年度もこの授業を履修し、結果、12月までのオーディションに見事に合格した。「一年かけて再チャレンジ」した、2人の言葉を紹介しよう。

* 「自分のことは自分で一番分かっている」といった姿勢をしているやつに、何を言っても無駄だし誰も何も言いたくなくなります。去年の自分は、これをそのままましていました。

* 様々なモノ・ヒト・コトがあって今の私がいる。ひとりではこうやって何か月も、泣いたり、悔しくてどうしようもない衝動に苛まれたり、うれしくて抱き合って仲間と喜び、感動してまた泣いて、そんな経験は絶対にできなかったと思う。誰かがいて初めて、私がいる。当たり前なことだけれど、そのことを、私の場合は2年をかけて学んだ。

(3) 実践篇

ACOPを履修した上回生が、学内外で様々な実践活動を行っている。本年度に彼らが行った活動と、アート・コミュニケーション研究センターが主導したプロジェクトの報告をP.153以下にまとめた。

(4) 謝辞

本年度も、地元・京都からはもちろんのこと、関東（東京・神奈川）や九州（福岡）からもたくさんの方々にボランティアで鑑賞者としてお越しいただきました。過去7年間で、延べ約1000名にも及ぶ皆様方がご参加くださったこととなります。学生たちの成長は、ひとえにこうした皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

ACOPの目的のひとつとして、将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、その不安や不満、喜び、ニーズなどを把握してもらうということがあります。こういったことが少しでも理解できてはじめて、将来彼らが仕事に就いた時、なにが求められ、なにをしなければならないかがより明確に分かってくると思うからです。3回だけの鑑賞会ではありましたが、お客様の様子や変化を観察することで、学生たちは多くのことを学ばせていただきました。また、お客様の一言が、彼らに勇気や喜びを与えてくださいました。

「がんばったのは自分だけ、がんばらせてくれたのはみんなです。支えられていることを心から実感しました。感謝しています」と述べた学生は、こうも言っています。「お客様アンケートの中に、「人生とは...生きるとは...絵から離れてもそれぞれの人がこの絵を元に考えることを思います。」という一文を見たときはとてもうれしかったです」。

学生たちの悩みと成長、そして皆様への感謝の気持ちは、本報告書の中程から掲載しました「学生最終レポート全回答」(P.58~)に、ぎっしりと詰まっております。その中から、学生の文章をふたつここに紹介させていただきます。

* 会場でスクリーンの前に立つナビゲーターにとって、お客様ひとり一人の表情や言葉、反応はとても助かります。心が救われることもあります。ときには戸惑って焦ることもありますが、初めて顔を合わせたお客様たちの多様な価値観や意見に触れて、さらに他者から別の意見が飛び交い...。そんな貴重な場にナビゲーターとして参加できたことが何より楽しかったです。貴重で、この先も経験できないような体験をさせていただきました。

ある学生は、「お客様はナマモノだ」と言っています。「自分の人生を背負って、私たちの拙いナビでも作品を鑑賞してくださる方がいる。人生を背負うというのは決して大げさなことではなく、それぞれの背景は一言一言の言葉に溶けて外側へ出てくる。これを五感すべてで受け止めて、返していかなければならない」。

この学生は、皆様を「鑑賞者」としてひとくくりにするのではなく、血の通った、個々の人間としてみてくれています。作品の見方は人の数だけあるということ、そして美術の専門家だけではなく、私たちひとり一人が、作品に「意味」を付加していくのだということを、理解してくれたのだと思います。「アート」とは、私たちひとり一人が真摯に作品と向き合う作業の中で生まれる、不思議な現象、深淵ですばらしいコミュニケーションなのです。

文末になりましたが、私たちに様々な実践や学びの場を与えてくださいました下記の皆様方にも心から御礼申し上げます。京都大学総合博物館、岡山県立美術館、水戸芸術館、鳥根県教育委員会浜田教育センター、日本パプテスト看護専門学校、大阪府立港南造形高等学校、「ながのアートプロジェクト」、大学美術教育学会、日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)、そしてITC京都クラブ。

年度末、今年の3月には、「連続セミナー ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー (VTS)」を開催しました (P.176 参照)。VTS は ACOP の源流ともいえるアメリカの対話型鑑賞です。セミナーには、VTS 開発者のひとりである、元ニューヨーク近代美術館教育部部長、フィリップ・ヤノウィン氏を講師としてお招きしました。募集受講者数は 100 名としていましたが、東日本大震災の直後にもかかわらず、150 名近い応募がありました。日本で初めてとなるこの VTS セミナーは、今年も引き続き 2 回 (中級編と上級編) 開催いたします。

また、このセミナーには日本ミュージアム・マネジメント学会より後援を頂戴しているほか、2011 年度開催分に対しては (財) アサヒビール芸術文化財団、アジア・カルチュラル・カウンシルより協賛をいただきます。さらに、本セミナーに先立ち 3 月 24 日には「フィリップ・ヤノウィンと VTS について語る会」を開催いたしました。これにあたり共催した日本ミュージアム・マネジメント学会関東支部エデュケーター研究会、および協力を賜りました文化庁に感謝の意を表します。

最後に、私たちの活動と研究に対して、2009 年度から 3 年間、日本学術振興会より科学研究費をいただき、京都大学および甲南大学と共同で研究活動を行っていることをご報告させていただきます。

福 のり子
京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科教授
アート・コミュニケーション研究センター代表
2011 年 5 月 31 日